

省略が可能な「のだ」の考察

——新書テキストを素材として——

石原佳弥子（専修大学）

要旨

本稿は、益岡（1991）が〈帰結説明〉と呼ぶ「のだ」の省略が可能であることを指摘し、この用法が、庵（2018）が平叙文の「のだ」の主な用法の1つに挙げる〈発見〉用法に相当するもので、前の文脈が言語化されているために「のだ」の省略が可能になることを論じた。その上で、テキスト中においても〈発見〉用法の「のだ」の省略が可能かどうか新書を用いて調査した。新書の〈発見〉用法はすべて「のである」と表記され、「のである」の省略が可能であった。それはこの用法の主題が直前の文と同一であることが必須の条件としてあり、さらに、話し手の告白、教示や強調を表わすという、野田（1987）が「非関係づけの「のだ」」と呼ぶ用法に相当するため、1人称による叙述スタイルを持つ新書では省略が可能になるためと考えられた。ただし、実際に「のである」を省略するとテキストに新たな話題を導入するという機能は弱まった。

1. はじめに

(1) と (2) は益岡（1991）が「のだ」の〈背景説明〉、〈帰結説明〉の例として挙げる文である。(1) の〈背景説明〉は、「のだ」を省略すると前の文の理由を述べているという解釈ができず、それぞれがただ事実を述べる文となるため2文の関係性は失われる。しかし、(2) の〈帰結説明〉は、「のだ」を省略しても2文の関係性は維持され、意味解釈も変わらないように感じられる。

(1) 私は国立大学を2つ受験した。当時は、一期校と二期校に分かれていたのだ。

(2) 当時は、国立大学を2度受験できた。とても幸運な時代だったのだ。 益岡（1991）

そこで、本稿では(2)のような「のだ」が省略可能となる理由を考察した上で、テキスト中においてもこの用法の「のだ」の省略が可能となるか調査し、さらに、この用法がテキスト中で担う機能も考察する。

2. 先行研究

2.1 〈言い換え〉用法の「のだ」と〈結論〉用法の「のだ」

庵（2018）は〈言い換え〉用法の「のだ」を、先行文（複数文でも良い）を繰り返し言い換えているというメーカーで、言い換えられた先行文と「のだ」文は意味的に等価な関係にあるという。マクグロイン（1984）は、パラグラフの最後の「のだ」は、書き手が既出の内容を改めて確認し、印象づける、もしくは、書き手自身の論旨展開の手がかりとする機能を持ち、省略が可能だという。

これらの先行研究を踏まえ石原（2023）は、〈言い換え〉用法の機能を持ちつつ、話題の最後に現われる「のだ」を〈結論〉用法と呼び、〈言い換え〉用法の下位に位置づけている。〈結論〉用法は話題の最後に現われることから後文との関係を維持する必要がなく、「のだ」を省略して読むことができると石原（2023）はいう。ただし、実際に〈結論〉用法の「のだ」を省略すると、後文との関係に影響はないが、前方の文を言い換えているという解釈ができなくなるため、前方の文との関係性が変わるという。したがって、実際に「のだ」を省略するこ

とはできず、「省略の読みが可能になる」と石原（2023）は表現している。(3)は石原（2023）が〈結論〉用法として挙げる例で、「のだ」文は「脳は退屈が嫌いだ。」から「のだ」文の直前の文までを言い換えており、話題の最後に現われている。

- (3) ここで重要なのは、実は競馬場に通う頻度ではない。どのくらい自分の頭を使い、積極的な行動を取っているかだ。脳は退屈が嫌いだ。「何も新しいことを考えるな」と命じられると、手持ち無沙汰のあまり、思い出を材料に「不安」「焦り」「嫉妬」といったゴミのような感情ばかり作り出す。逆に、考えるネタをふんだんに与えれば、「楽しい、もっとやりたい」という感情を放出する。子どものように単純なのだ。

僕は、その効果を実際に何度も感じてきた。(教育) 石原（2023）

2.2 〈理由〉用法の「のだ」

庵（2012）は「P. Q のだ。」という文でQがPの理由を説明するときの「のだ」を〈理由用法〉と呼び、「からだ」に置き換えられるという。石原（2023）は〈理由用法〉の「のだ」は、そもそも「S1 ので、S2 だ。」という1つの文（命題）を「S2 だ。S1 のだ。」と2つに分けたものであり、2文の結びつきは強いという。また、「S1 のだ。」は「S2 だ。」に従属するノデ節に相当するため、基本的に「のだ」文には南（1974）の階層構造のB類（「が」の文、対比の「は」の文）までしか現われず、焦点（スコープ）はノデ節にあるという。本稿では〈理由〉用法の「のだ」を庵（2012）、石原（2023）と同定義とし、さらに、三上（1953）が指摘する、文の流れが逆向き（結果（S2）→原因（S1））になることも〈理由〉用法の必要条件とする。〈理由〉用法は、(4)のように文の流れが逆向きにあり、2文で1つの命題を述べるもので、「のだ」を省略すると文の関係性は失われ、ただ単に事実を述べる2つの文の羅列となる。

- (4) 風邪を引いた。雨に濡れたのだ。

2.3 〈帰結説明〉の「のだ」と〈発見〉用法の「のだ」

益岡（1991）は、前掲(1)のように与えられた事態に対する理由や事実を述べた「のだ」文を「背景説明」（「事実文による説明」と呼び、前掲(2)のように与えられた文から何が帰結するかを述べる「のだ」文（「判断文」による説明）を「帰結説明」と呼ぶ。(1)の「背景説明」は「のだ」を省略して読むと、前の文の背景を説明しているという解釈ができなくなり、2文はそれぞれ事実を述べる文となる。しかし、(2)の「帰結説明」は、前の文の「当時は」が「のだ」文の非顕現の主題でもあることから、主題の継続によってテキストの結束性が維持され、全体の意味も変わらないように感じられる。

- (1) 私は国立大学を2つ受験した。当時は、一期校と二期校に分かれていたのだ。

- (2) 当時は、国立大学を2度受験できた。とても幸運な時代だったのだ。(再掲)

益岡（1991）は、「背景説明」とは真偽性を主張するものではなく、すでに「真であることが確定した文」であり、「帰結説明」とは先行する文が何を意味するかという課題に対して、後続する「のだ」文がその解答を与える文で「わけだ」と関係性を持つという。ただし、「わけだ」が話し手（表現者）と聞き手の両者が共有する一般的な知識からの帰結を表わすのに対し、「のだ」は話し手（表現者）の知識に依存し、話し手（表現者）の主観的な判断による帰結を表わすという違いがあると益岡（1991）が指摘するように、〈帰結説明〉の「のだ」

を「わけだ」に置き換えることはできない。

要するに、〈背景説明〉の(1)は「S1 ので、S2 だ」に置き換えられ、「S1 (結果) →S2 (原因)」と文の流れが逆向きにあり、2文で1つの事態を述べているので〈理由〉用法と言えるが、〈帰結説明〉の(2)は、「S1 (結果) →S2 (原因)」という逆向きの流れにはなく、「当時は、国立大学を2度受験できた」という先行文に対する帰結として「とても幸運な時代だった (のだ)」と話し手(表現者)の主観が述べられており、この「のだ」は話し手(表現者)の判断を表わすモダリティ的側面が強いものとなっている。それでは(2)の〈帰結説明〉はどのような用法なのか。

本稿では、〈帰結説明〉を庵(2012)が〈状況と結びつける〉用法(庵(2018)が〈状況に対する解釈〉と呼ぶ用法と同じと見なす)の1つに挙げる〈発見〉に相当するものと捉えている。庵(2018)は平叙文の「のだ」を大きく〈言い換え〉、〈理由〉、〈状況に対する解釈〉の3つの用法に分け、その内の1つの〈状況に対する解釈〉用法を〈状況に対する話し手の解釈〉と〈発見〉の2つに分けている。庵(2012)は、(5)のように話し手が自分自身に対して説明する「のだ」を〈状況に対する話し手の解釈〉と呼び、先行文が言語化されていないため「からだ」には置き換えられないと述べており、したがって〈理由〉用法と考えられる。他方、〈発見〉は、(6)のように発話以前に存在した状況(文脈)と発話時に認識した発見との関係を表わす「のだ」で、Pを発話以前に存在した状況(文脈)とし、Qを発話時に認識された事態とすると「[P] Qのだ。」と表わせるものだという。そして、Pの含意がなくなり、単なる事実の発見を表わす文にはなるが、「のだ」の省略が可能だという。

(5) (朝、道が濡れているのを見て) 昨夜雨が降ったんだ。

(6) (あまり関心がなかった漫才コンビの芸に感心して) このコンビ、おもしろいんだ。 庵(2012)

以上から、発話以前に存在した状況(文脈)に対して、話し手(表現者)が発話時に認識したことを述べる〈発見〉と、与えられた文(状況)から話し手(表現者)の判断を帰結として述べる〈帰結説明〉は、どちらも以前から存在する事態について、認識した時点において話者(表現者)の主観(判断)を述べる文であり、話者(表現者)の判断を表わすモダリティ機能に強く傾斜した同じ用法の「のだ」と考えることができる。しかし、〈発見〉は発話以前に存在した状況(文脈)が言語化されていないため、「のだ」を省略すると状況の含意が失われ省略できないが、〈帰結説明〉は前文で発話以前に存在する状況が言語化されているため、2文の関係性を表わす「のだ」の省略が可能になると考えられる。以上を〈帰結説明〉の「のだ」の省略が可能になる理由と本稿では結論づける。これ以降、〈帰結説明〉の「のだ」を〈発見〉用法と呼ぶことにする。

3. 問題のありか

益岡(1991)の〈帰結説明〉と庵(2012)の〈発見〉を同じ用法の「のだ」と見なし、この用法の「のだ」が書きことばのテキストにおいても省略が可能となるか調査する。また、テキストでこの用法が担う機能についても考察する。

4. 調査の対象と方法

調査の対象は表1に挙げた10冊の新書作品とする。新書は、入門書や学問の解説など専門的な内容が扱われているものが多く、小説などあらゆるジャンルが扱われている文庫とは異なり、常に書き手による1人称による叙述スタイルを持ち、小説のように複数の登場人物に視点が移動することがない。

本調査では、現代日本語における「のだ」の現象を明らかにするために2000年以降に出版された新書作品（200ページ前後からなり、図、表、イラストや写真などが多用されていないもの）を選んだ。また、調査対象とした新書は「スポーツ」「歴史」「趣味」など多岐にわたるテーマから選んだ。

内省によって〈発見〉用法と判断した新書の「のだ」を抜き出し、考察を進める。

5. 調査結果

5.1 新書の〈発見〉用法の数

新書の〈発見〉用法の「のだ」はすべて「のである」と表記されていた。そのため、これ以降〈発見〉用法の「のだ」を「のである」と表わす。新書10冊（総文数21,672）の「のだ」（総数1,379）の中で〈発見〉用法と解釈できたのは18例で、「のだ」全数の1.3%であった。作品ごとの〈発見〉用法の数は表1の通りである。

表1 作品別〈発見〉用法の「のである」の数

作品名	文数	のだ全数	〈発見〉用法
「おめでたい人」の思考は現実化する	1,442	105	1
すべての教育は「洗脳」である	2,501	248	3
食べもの探訪記	1,966	56	1
小さな建築	1,829	180	7
テツに学ぶ楽しい鉄道旅入門	2,202	158	1
二軍監督の仕事	2,142	96	1
農業新時代	2,256	122	1
武士の家計簿	2,683	195	3
料理は女の義務ですか	2,380	77	0
和食の知られざる世界	2,271	142	0
計	21,672	1,379	18

5.2 新書で見られた〈発見〉用法

新書で〈発見〉用法と判断した用例を(7)から(9)に挙げる。

(7) 展示棚だけではなく、カフェのカウンターやベンチまで、このポリゴニウムのシステムで楽々と組み立てられる。そうなる¹⁾とまたまた欲が出てきて、このシステムでまるまる家を作ってしまいたくなったのである。同じく高山市内にある富山大学の学生に声をかけて、「ポリゴニウムで作る家」というコンペを企画した。住宅の設計にまだ慣れていない彼らだからこそ、二〇世紀の「消費のための家」に染まらない、新しい種類の「小さな建築」のアイデアがでてくるかもしれないと期待したのである。
(建築)

(8) 彼は、時刻表の収集家としても突出している。JR中心の時刻表ばかりではなく、めぼしい私鉄の時刻表（関東や関西の大手私鉄を中心に）も集めている。それどころか、海外の時刻表、とりわけヨーロッパの鉄道時刻表にもご執心だ。はじめは、ヨーロッパ全域を網羅する鉄道時刻表として有名なトーマスクック社の『ヨーロッパ鉄道時刻表』を毎号のようにむさぼり読んでいた。しかし、そのうちそれが末端のローカル列車に関しては詳しくないと分かると、各国の公式鉄道時刻表を集めだしたのである。これならローカル列車を含めて全列車の全停車駅の時刻が出ているからだ。

ところが国内の時刻表と異なり、それらを集めるのは至難のわざだ。(テツ)

- (9) スタッフを集めて、アイデアを出し合っていると、飛騨高山に面白いおもちゃがあるという話が出てきた。千鳥という名のそのおもちゃは、短い木の棒が数本入っているだけの、そっけないものであった。ところが、この木の棒にとんでもない秘密がかくされていたのである。

通常の木造建築は、きわめてシンプルな原理で構築されている。日本に限らず、二本の木の棒を「織る」というのが世界中の木造建築の共通原理である。当然のことながら、一本の木の棒だけでは建築とはならない。(建築)

(7) から (9) の下線の「のである」は前方の文からの帰結的な叙述で、書き手による判断の文と解釈でき、「わけだ」に置き換えることはできない。そして、(7) は非顕現の 1 人称の主題が、(8) と (9) は「彼は」、「千鳥という名のそのおもちゃは」という 3 人称の主題が前文から継続されていて、テキストの結束性が維持され、「のである」の省略が可能となっている。

ところで、庵 (2012) は〈発見〉用法を、発話以前に存在する状況と、発話時の認識の関係を示すものと述べているが、新書の〈発見〉用法と考えられる「のである」は、書き手があたかも新たに発見したことを述べているようだが、実際には既定の事態の叙述である。野田 (1997) は、必ず読み手を必要とし、「P. Q のだ。」という文において、聞き手は認識していないが、話し手 (表現者) は認識している事態 Q を提示して、それを聞き手に認識させようとする話し手 (表現者) の心的態度を表わす「のだ」を「対人的ムードの「のだ」」と呼び、「ムードの「のだ」」の下位に位置づけている。そして、この「対人的ムードの「のだ」」には、Q が既定の事態であることを特に示すために用いられ、告白、教示や強調などのニュアンスが帯びることが多い「非関係づけの「のだ」」と、Q が P の事情や意味であることを示し、Q が既定の事実であることは特に意識されない「関係づけの「のだ」」があるという。

つまり、新書の〈発見〉用法では、書き手があたかもその時点で発見したかのように述べてはいるが、すべて既定の事態の叙述であるため、「のである」は「既定の事態」であることを特に表わす「非関係づけの「のだ」」の用法に相当すると考えられる。しかし、1 人称による説明・解説というスタイルを持つ新書では、書き手の主観的判断による既定事実の叙述であることが自明なため、「非関係づけの「のだ」」の省略が可能になると思われる。また、前の文の主題が非顕現で「のである」文にまで継続するため、「のである」を省略してもテキストの結束性が維持されている。

5.3 新書の〈発見〉用法の機能

次に、新書の〈発見〉用法のテキストでの機能を考察する。前掲の (7) から (9) の〈発見〉用法の「のである」は、書き手にとっては既定の事態であるが、読み手にとっては新たな情報であり、帰結的な叙述が新たな話題を導入するものとなっていた。つまり、新書の〈発見〉用法は、テキストに新たな話題を導入するという、話を前に展開する前景的な機能を持つものと言える。しかし、「のである」を省略してしまうと、「非関係づけの「のだ」」の持つ、告白、教示、強調というニュアンスが失われ、テキストに新たな話題を導入する機能は弱まった。ただし、(10) の下線の「のである」文のように「ところが」という接続詞が前置するなど、条件によっては「のである」を省略しても新たな話題を導入するという文の機能が弱まらないように感じられる例も見られた。

- (10) 揚げ餅のなかにピーナツの細片が入っていて、変化を利かしてあるもの。前者は口のなかの粘りが足

りず、後者は味は少し変わっていても、口の中でピーナツの細粒だけが舌にのこって、わたしにとっては失格だ。

もろん揚げ餅として好きだからときどき食べているが、通ぶってみせれば失格だ。大げさにいうと理想の揚げ餅を求めて幾年ぞや、ということになる。子どものころどこかでいつかそんな理想の揚げ餅に出会ったことがあり、その味が忘れられないのだ。

ところが四、五年まえ、念願がかなって理想の揚げ餅を見つけたのである。それは東京・文京・根津の裏通りのお菓子屋さんだった。(食べもの)

5.4 帰結の接続詞が前置した「のである」文

新書では、帰結を表わす接続詞「それゆえ」が「のである」文に前置すると、「のである」の省略が難しくなる例が見られた。(11) にその例を挙げる。

- (11) 普通の建築家は、大きな仕事を頼まれると喜ぶといういやしい癖がついているが、実は小さい仕事ほど大きなチャンスなのである。大きい仕事の中で、意味のある新しいアイデアを実現するのはとても難しい。つい、既成の退屈なアイデアを再利用し、水増しすることになりかねない。それゆえ、大きな建築は、ただの「大きなゴミ」になりやすいのである。

「普通の住宅地の中の敷地」という一言にもひかれた。まわりの木造住宅のヒューマンスケールも、千鳥とは相性がいいはずだった。(建築)

(11) の下線の「のである」文には帰結を表わす接続詞「それゆえ」が前置し、前方の文の帰結を述べているが、(11) の「のである」を省略することは難しい。その理由は、「のである」文とその直前の文との主題が異なるためと考えられる。(11) の「のである」文の直前の文は、非顕現だが1人称が主題と解釈できるが、「のである」文には「大きな建築は」と直前の文とは異なる主題が顕現している。この(11) の「のである」は、〈発見〉用法と見なした(7) から(10) とは違って「わけだ」に置き換えることができ、テキストに新たな話題を導入する機能を担うものとなっていない。したがって、帰結の接続詞が前置した「のである」文は〈発見〉用法ではないと考えられる。しかし、(12) のように帰結の接続詞「だから」が前置していても、「のである」文の主題が直前の文の非顕現の主題(「僕は」と同一と解釈できると「のである」の省略は可能であった。(12) の「のである」文は「わけだ」に置き換えられず、新たな話題を導入する機能も感じられる。

- (12) このことに疑問を抱いている人はおそらくほとんどいないだろう。しかし、僕にとっては大きな疑問だった。「お金を払っているんだから、学校が自分たちに何かを与えてくれるのは当たり前」「働いてやっってるんだから、お金をもらって当たり前」。そんな、お金を介した思考停止がはびこっているように感じていたのだ。

だから僕は、逆転の発想をしたのである。「お金を払って、面白いことができそうな組織に所属する」。これなら、誰もが自分から動く。「お金を払ってるんだから、元が取れるくらいは何かをやらなければ」と思うからだ。(教育)

以上から、接続詞の前置の有無が〈発見〉用法を決定するのではなく、直前の文と同一主題であることが〈発見〉用法の必要条件であることがわかった。また、(12) のように、顕現する必要のない1人称主題(「僕は」)が敢えて顕現する場合には、「のである」を省略してもテキストに新たに話題を導入する機能が弱まらないよう

に感じられる。

6. まとめと結語

本稿で〈帰結説明〉と同じ用法と見なした〈発見〉用法の「のだ」は、主観的判断を表すため「わけだ」に置き換えることができなかった。そして、直前の文と「のだ」文の主題が顕現、非顕現にかかわらず同一であり、テキストの結束性が維持されていることが必要条件となっていた。

新書の〈発見〉用法はすべて「のである」と表記され、書き手があらかじめ認識している既定の事態を、あたかもその時点で発見したかのように述べるもので、テキストに新たな話題を導入する機能を担っていた。また、既定の事態であることを特に示す「非関係づけの「のだ」」に当たるため、1人称による説明・解説のスタイルを持つ新書では「のである」の省略が可能になると考えられた。ただし、実際に「のである」を省略すると置かれた文の条件によっては新たな話題を導入するという機能が弱まった。

新書の〈発見〉用法は用例数が少なく、「のだ」全体の1.3%に過ぎなかったが、〈言い換え〉用法や〈理由〉用法にはない、テキストに新たな話題を導入するという話を前に進める前景的な叙述としてテキストの構造化に関わるものであった。

参考文献

- 庵功雄 (2018) 『一步進んだ日本語文法の教え方2』くろしお出版.
- 庵功雄 (2012) 『新しい日本語学入門 第2版』スリーエーネットワーク.
- 石原佳弥子 (2023) 「「のだ」の〈言い換え〉用法に接続詞が前置する条件の一考察：新書テキストを素材として」『一橋日本語教育研究』11, pp. 47-57, 一橋日本語教育研究会.
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版.
- マクグローイン・H・直美 (1984) 「談話・文章における「のです」の機能」『月刊言語』13-1, pp. 13-1, 大修館書店.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版.
- 三上章 (1972) 『現代語法序説』くろしお出版 (『現代語法序説』(1953) 刀江書院の復刻版) .
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店.

用例出典

『「おめでたい人」の思考は現実化する』(和田秀樹 2016, 小学館) / 『すべての教育は「洗脳」である』(堀江貴文 2017, 光文社) / 『食べもの探訪記』(吉本隆明 2001, 光芒社) / 『小さな建築』(隈研吾 2013, 岩波書店) / 『テツに学ぶ楽しい鉄道旅入門』(野田隆 2016, ポプラ社) / 『二軍監督の仕事』(高津臣吾 2018, 光文社) / 『農業新時代』(川内イオ 2019, 文藝春秋) / 『武士の家計簿』(磯田道史 2003, 新潮社) / 『料理は女の義務ですか』(阿古真理 2017, 新潮社) / 『和食の知られざる世界』(辻芳樹 2013, 新潮社)

謝辞：本稿の考察を進めるにあたって『一橋日本語教育研究』の査読者から有益なご助言をいただきました。この場をお借りして心からお礼申し上げます。